
詩人の方程式

キップル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

詩人の方程式

【Nコード】

N3385J

【作者名】

キップル

【あらすじ】

なんだかんだ理系っぽいことを書いてます（笑）

(前書)

2005・08・18 初出 / Domin Diary

バリバリの文系なわけですが、小学生からSFは大好きだったし、科学ももちろん好きでした。

高校1年で物理Iを学び、2年になるときに物理IIを希望したのですが、文系クラスで物理を希望したものが20人弱しかおらず、学校側から他の科目に変更してくれないか、と言われたのです。僕は最後まで抵抗した5人のうちの一人でした。

もはや諦めるしかないと分かっていたから僕は最後の抵抗をしました。「どんな点数を取っても文句は言わないでくれ」

みたいなことを本当に言っていたわけです。学校側は無言でしたが暗黙の了解をしてくれたように思います。

化学にしたのです。で、テストは毎回10点から20点のあいだ。それでもいわず「追試・再試」は一度も受けていません。

ただし化学の先生はいつも悲しそうでした。

どうしても物理を勉強したかった（この歳の頃は本当に向学心があつた）僕は、クラスメイトの兄が使った物理IIのテキストを譲ってもらって、

独学で勉強しました。当然かなりしんどかったです。しかしなんとか進みました。

最後の方に、ある方程式が出てきました。予備知識がなかったので理解するまでかなりの時間が掛かりました。

そしてなんとなくその式の意味するところが見えたとき、戦慄が走りました。もうお分かりかと思えます、あの式です。

$E = mc^2$

「なんじゃこりゃ?？」という感じ。なんでそれぞれ無関係（と思われる）3つの値がひとつの式にまとまるんだ?？」

それも、こんな単純な形で！これがそもそも始まりでした。

とはいえ、これには先駆けがありました。それは物理Iで出てきた

もつと単純な方程式です。

$$F = m$$

Fは力、mは質量、は加速度です。物理Iというか「古典物理」は、実はこれで成立しているといっても過言ではない式です。

様々な関係がこの式から類推できるほどです。このときもかなり「感心」したので覚えていきます。

僕がびつくりした「式」や「理論」が他にもいくつかあります。これらは素晴らしい「詩」を読んだ時と似たようなショックを与えてくれるので、僕の中ではほとんど同値です。

インターネットでは累乗を表すときにずっと「^」を使ってきました。今ではスタイルシートなどや画像を使って正確に表すこともできますが、ここでは旧来の形式で書くことにします。わざわざ画像も面倒だし…

$$E = mc^2$$

理解してなくとも見た事だけは絶対にあるあの式、アインシュタインが「ひねり出した」方程式です。

Eはエネルギー、mはやはり質量(mass)、cは光速度で、定数です。つまり何を言っているのかと言うと、

「エネルギーと質量は同じ」ということなのです。

そして定数のcはもともとがばかでかい数なのでそれを二乗するのとてつもない値になります。ものすごく小さな質量がもしエネルギーに変わったとしたら、爆発的な数値になるわけです。

それを実際に利用したのが、「原子炉/核爆弾」そして「水素爆弾」です。水素爆弾の発電版である「核融合炉」はまだ実験段階です。

p q 定数

「 p と q の積はある定数以上である」という意味です。
 p は物体の運動量、 q は位置です。ここで h は p と q の「あいまいさ」を表しています。

q が0に等しいということは物体の位置が決定しているという意味になります。では実際に観測して物体の位置を決めましょう。

q が限りなく0に近づくとどうということが起こるか。右辺は一定の値ですから、 p が限りなく無限大になっていきます。

それはどうということかというところ、運動量が限りなくあいまい、つまり「決められない」のです。

p を測定した場合には逆になります。つまりこの方程式は「位置と運動量は同時に測定できない」ということなのです。

これは感覚的にかなり分かんと思えます。写真から車のスピードは分かりませんが、動いているならば位置など決められないのと同じです。

この方程式が導きだされる理論は「不確定性原理」と言われるもので、量子論とおおいに関連があります。

上の式と同等に

$$E \quad t \quad \text{定数}$$

があります。これは、エネルギーと時間の関係です。これをちょっと考えてみて下さい。 t をものすごく小さな値にするとどうなるか。

エネルギーは限りなくあいまいになります。ということは、ものすごく短い時間では、エネルギーはどんな値にもなり得るということになります。

もしそこになにもないとしても、限りなく短い時間内では大きなエネルギーが発生する可能性がある、ということなのです。

さて、このことからあることを連想した方もいるのではないかと思います。が…。

$$e^i + 1 = 0$$

この等式は最近少し有名になってきました。ここでeという定数を説明しているとしても大変なものでばっさり切り捨てます。ごめんなさい。

「ネピア数」というある定数で、利息計算などに大変便利な不思議な数とだけ書いておきます。無理数です。

iは虚数、πは円周率、これはいいですよ。しかし、なんでこの3つの数と1がたったひとつの式に、しかもこれほどスマートに同居するの??

この式は「オイラーの等式」呼ばれます。実は数学者に言わせるとこの式には深遠な意味などないのです。

ただ、「人類の至宝」と呼ばれることもあるこの数式、数学者より文学者を刺激してばかりいます。

不完全性定理

これは数式ではありません（数式で表せないこともないのですが…）。上に出てきた「不確定性原理」と似ていますが別物です。ゲーデルという人が証明した定理で、ふたつあります。

第一不完全性定理

自然数論を含む帰納的に記述できる公理系が、無矛盾であれば、証明も反証もできない命題が存在する

ここから「文系人」の意識が始まりますので要注意（笑）。これをとても危険な方法で翻訳すると、

「とても厳密に整った論理体系の中だけでは、正しいか誤りか推論できないものが出てくる」

となります。矛盾のように聞こえます。しかし本当なのです。完璧であれば完璧ではない、という意味、これはとても興味がわく、でしょう？

第二不完全性定理

自然数論を含む帰納的に記述できる公理系が、無矛盾であれば、自身の無矛盾性を証明できない。

こちらを言い換えるかどうか、お遊びですよ。

「矛盾のない論理体系は、矛盾のないことを証明できない」
どうです、すごいでしょ。

これは「言葉とは？」と、言葉で理論するのは無駄であると言っているように、文系人は感じてしまうのです。

だいたい合っているように思っています。言葉の議論も不完全性定理も、「もつと上の次元」を必要とするという意味において。

僕は「量子論」と「不完全性定理」のベースでいくつか詩を書いていきます。しかし多かれ少なかれすべての詩人という人種は、

「心は、心を描くことができるのか？ できないのか？」と自問自答しながらいつもいる人たちなのではないか、と信じています。

そんなとき、詩などの文芸や、他の芸術よりも、たったひとつの数式や理論が、手助けをしてくれることがあります。

そんなものにもつと出会いたいと、いくつになっても思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3385j/>

詩人の方程式

2010年10月20日19時49分発行